内的独白の下位区分としての「内的独白」「内的対話」「内的物語」

——アンナ・ゼーガース『第七の十字架』の話法研究——(注1)

神田和恵

1.「内的独白(Innerer Monolog)」の概念規定について

『ドイツ言語学辞典』によれば，内的独白（Innerer Monolog）という概念には，「意識の流れ」を指す一般的用法と，ドイツ語圏特有の，自由直接話法という言語形式を指す用法とがあるという。(注2) Hosaka（1978）は，Steinberg（1971）に基づいて，内的独白の文法形態を，導入詞なしの直接話法（自由直接話法）(Direkte Rede ohne Einführung, mit od. ohne Anführungszeichen）と表現している。(注3) Steinberg（1971）では，「意識の流れ」の用法として現れた内的独白の例にも考察を加え，体験話法とも非常に近く，境界のつけにくい場合も多いことを述べている。(注4)

本稿では，「内的独白」の用語を「意識の流れ」を表す広義では用いず，基本的には狭義の文法形態上の規定として，つまり，自由直接話法の意味で使用する。「意識の流れ」の意味で使用すれば，体験話法や接続法による引用符抜きの間接話法などの形態も含み，様々なスカーラ(注5)の話法の可能性を持つことになるが，自由直接話法の形態であると規定すれば，座標軸の原点(hier-jetzt-origo)は登場人物のみにあることになり，語り手のパートと登場人物のパートとの重なり合い(dual voice)(注6)を特徴とする体験話法などとは明確に区別できる。

2.『第七の十字架』の内的独白（Innerer Monolog）——リーゼルの定義への批判的考察

ゼーガース『第七の十字架』の内的独白の例を最初に取り上げているのは，

『第七の十字架』の体験話法に言及した最初の文献でもあるRiesel（1954）である。

リーゼルは，体験話法には発話再現(Redewiedergabe)のみでなく思考再現(Gedankenwiedergabe）の例が多いことを挙げて，„erlebte Rede“という専門用語（Terminus）の他に „erlebte Reflexion“ という用語が多く見られるのはそのためだとしている。そして思考再現（リーゼルによれば erlebte Reflexion）は内的独白（innerer Monolog）に近いとしている。erlebte Reflexion とinnerer Monolog の違いをリーゼルは，次のように規定している。

内的独白（innerer Monolog)と体験話法［または体験的思考（erlebte Reflexion)］の間には次のような違いがある。体験話法では登場人物と作者（リーゼルは作者と語り手を明確に区別していないようである―― 神田）が一体化しているが，内的独白はそれに対して，通常①主人公が自分自身であれこれの思考をめぐらすのである。この本質的差異は，言語形態にも現れる。内的独白はたいていIch-Formに導かれ，②ときには筋道だてて，ときには脈絡なしに，断片的に，思考の流れの過程に従って生起する。

（神田試訳，下線は神田）[注7]

上記のリーゼルの説明のうち，体験話法の規定については，「作者」という用語を「語り手」と読み変えれば一応納得できるが，内的独白の概念規定はそれよりさらに曖昧である。もしも「意識の流れ」の意味で用いているならば，文法形態としては体験話法もその中に含まれることになってしまうが，[注8] リーゼルは「体験話法」と「内的独白」を比較して説明しているのであるから，「意識の流れ」の意味で使用しているとは言い切れない。しかし，Riesel (1954), Riesel (1959) ともに，[注9]「内的独白とは思考の表現である」ことを重視しているのは確かである。

体験話法との比較で言うならば，上記引用のうち，「内的独白はたいていIch-Formに導かれる」という箇所は，体験話法にもich-Formは存在する[注10]という事実によって，不十分な規定と判断せざるをえない。さらに，内的独白の中には，ich と du の対話の形をとるものや，du への一方的語りかけの形をとるものな

どもあるので[注11]，人称だけでは内的独白を規定できない。

しかし，リーゼルの文献が二つとも1950年代のものであることを思えば，内的独白の規定の曖昧さを批判するよりは，前述したように，リーゼルが体験話法の思考再現の側面を強調した用語である体験的思考（Erlebte Reflexion）と内的独白との近さを指摘していることの方が，重要かもしれない。海老原（1964）がRiesel（1959）からの例（下記例B）をその点に限って紹介しているのは[注12]，的を射たやり方であったといえよう。

次に，リーゼルの引用中下線部②であるが，文が筋道だっているか脈絡がないか，断片的であるか否かというのは，思考の過程がどのような文構造によって表現されるのか，文の構成要素の省略はあるのかという問題であり，内的独白のみに特有な性質ではない。体験話法の場合も，思考の緩急に従って文の断片化や文要素の省略などの文の彩は容易に生じることである。むしろ，文法形態上は語り手のパートに属する時称や人称が採られている中で，そうした文要素の省略や断片化や感嘆文，疑問文などの多用によって主人公の息づかいやイントネーションが文中に織り込まれることこそが，体験話法の特徴といってもよいのである[注13]。この点では，リーゼルの引用下線部②は，「意識の流れ」の意味の内的独白の説明に近いことになろう。

また，下線部①では「自分自身で」としたところに内的独白の特徴を表現しようという意図は見えるが，それよりは，

［「思考をめぐらす」人物のその思考を，人物自身の座標軸から，語り手が介在していないかのように導入詞（denkenなど）抜きの直接話法で表現し，同様に読者にも受信されるのが内的独白である。］

と言えば，体験話法との違いがもっと浮き出よう。

ところで，リーゼルが，「体験話法においては語り手と主人公が同化する」と指摘したのは，同化の程度には様々な段階があることまでは述べなかったにせよ，重要な指摘であった。これをPascal(1977)では dual voice と称したのであった。

リーゼルは，次の例B[注14]を，内的独白の典型的な例として挙げている。

B: Riesel (1954, S.330) (1963, 2.Aufl. S.409)より

„Ihr Vater hieß Franz Wallau, Ihre Mutter Elisabeth Wallau, geborene Enders." Statt Antwort kommt Schweigen von den durchgebissenen Lippen.—— ① *Es gab einmal einen Mann, der Ernst Wallau hieß.* ② *Dieser Mann ist tot.* ③ *Sie waren ja eben Zeuge seiner letzten Worten.* ④ *Er hatte Eltern die so hießen.* ⑤ *Jetzt könnte man neben den Grabstein des Vaters den des Sohnes stellen.* ⑥ *Wenn es wahr ist, daß Sie aus Leichen Aussagen erpressen können, ich bin toter als alle Ihre Toten.*

(S.191. 第3章Ⅳ, 下線とイタリック体は神田。イタリック体の部分が内的独白)

B': 「あなたの父の名はフランツ・ヴァラウ, 母はエリーザベト・ヴァラウ, 旧姓エンダースですね」

返事のかわりに, 噛みしめられた唇からは沈黙が出てくる。—— かつてエルンスト・ヴァラウという男がいた。その男は死んだ。あなたこそまさに, 彼の最後のことばの証人だったのだ。彼には, しかじかという両親があった。いまこそ父の墓石のそばに, 息子の墓石を建てればよい。あなたが死体から供述を圧し出すことができるというのが本当でも, あなたの死者たちの誰よりも, おれはもっと徹底的に死んでしまっているのだ。

(山下・新村訳 p.149 ——下線は神田。下線部が内的独白の訳)

ところで, リーゼルが内的独白の典型として挙げた例B自体が, 先に引用したリーゼル自身の内的独白の定義とは矛盾している。つまり, 例Bの内的独白は, 厳密にはich-Formのみではない。イタリック体の箇所のうち①③④の3文は, ヴァラウの内面の声ではあるが, ヴァラウが童話的語りを借りて自分自身を死者に見立てているため, 直接話法でありながらもich-Formではなく, 三人称過去形となっているのである。これは, 語りの時制の様相を示しており, 「内的独白」というよりむしろ, 「内的物語」とでも命名した方がぴったりする。従って本論

の筆者は，『第七の十字架』における，①③④のような三人称過去形群の童話的語りの様相を持つ内的独白を，仮に「内的物語」と呼んでおく。

例Bは典型的な内的独白であるというリーゼルの主張に筆者は（もちろんイタリック体の部分に限って），文法形態としての内的独白の意味においても賛成なのだが，例Bを含む『第七の十字架』の内的独白においては，人称による下位区分として，ich-Formの「内的独白」型，ich-duの対話形式の「内的対話」型，三人称または一人称による物語形式の「内的物語」型の三つを立てれば，より構造が明確になるのではないかと思う。

それに関連して，注目したい現象がある。①から⑤までの文法形態が，体験話法や地の文に近い三人称過去形及び現在形であることが，英語版の『第七の十字架』に一つの作用，つまり誤解ををもたらしていると見られる例があるのである。つまり，英語版では，ヴァラウの内的独白の箇所はもともと皆イタリック体で印刷されているのに，例Bの①から⑤までは，イタリック体になっていないのである。さらに，ドイツ語版で現在形になっている②の文までが，英語版ではこっそり過去形に変えて訳されている。この現在形を重視すれば，英語版の訳者も①からすべてイタリック体にしたことであろうが。

B”：① Once there had been a man named Ernst Wallau. ② That man <u>was</u> dead.
③ Hadn't we just witnessed his last word? ④ He had had parents whose names were as cited. ⑤ One might as well place beside his father's tombstone that of his son. ⑥ *If it is true that you can get depositions out of a corpse, I'm deader than all your dead.*
(“The Seventh Cross” p.165.)

例B”を見れば，英語版では，まさにich-Formの文だけを内的独白扱いにして，イタリック体にしていることが観察される。『第七の十字架』の内的独白の下位区分に気付かなかったための誤解である。

3．独白型，対話型，物語型 —— 内的独白の下位区分

『第七の十字架』第3章Ⅳには，実例Bの後にも次々にヴァラウの内的独白が続いていく。黙秘を守るヴァラウの思考は，すべて内的独白の形で，つまり文法的には直接話法で，再現される。直接話法の文はすべての文要素が人物の座標軸上にあるのだから，名の通り，最も直接的に，なまの形で人物の内面を伝達する。ヴァラウはスパルタクス団の創設に加わった人物らしいことが，オーヴァーカムプの尋問の中に出てくる。ヴァラウは黙秘しているため，もちろんそれには答えないのだが，明らかにコミュニストの幹部として描かれている。少なくともゲオルクにとってのヴァラウは，指導者として存在している。主人公ゲオルクの内的独白の中に最もよく出てくるのがこのヴァラウの声である。ゲオルクは判断に迷ったり自分自身に負けそうになったりすると，自己の内面に住み着いているヴァラウ像にduで呼びかけ，ヴァラウと対話する形での内的独白を行い，思考を進めていくのである。この型の内的独白を，本論の筆者は仮に，「内的対話」と命名しておく。

さて，ヴァラウの内的独白に戻るが，コミュニストとしての信念に裏打ちされたヴァラウの抵抗は，最も直接的に伝えるに足るだけの，明確な動機を持ったものであるという作者の位置づけが，作者の選んだ話法 —— ここでは自由直接話法 —— にも無意識のうちに示されているのではないだろうか。自由直接話法は，『第七の十字架』の中で他の登場人物の思考再現にもよく使われるが，特に多いのは，主人公ゲオルクと，ゲオルクの旧友でこの物語のもうひとりの主人公と言ってもよいフランツの思考再現である。それは，主人公として内面をいきいきと描かれるべき存在であれば，当然のことと言えよう。

さて次に，例Bに続くヴァラウの内的独白の例をいくつか挙げる。全部を引用するのはとても多すぎるため部分的な引用にとどめておくが，5ページ足らず(232行）のヴァラウの尋問の場面(S.192-198）に，11箇所，合計で72行の内的独白が使用されている。そのうち約1 行は，歩哨の内的独白であるが，あとはすべてヴァラウの黙秘中の内的独白である。これは，単純に分量的に率を出せば，この場面全体の約30.6% にあたる。

まず，上記例Bに続いて，引用符付きの直接話法で，警部オーヴァーカムプの

尋問のせりふがあり，次に，黙秘するヴァラウの思考が内的独白で続く。以下，ときに短くオーヴァーカムプの動作の描写などもはさむが，ほとんどこの順序での，［尋問］対［沈黙／内的独白］の奇妙な対話が続けられる。

C: *Als ich noch am Leben war, hatte ich Mutter und Schwester. Ich hatte später einen Freund, der die Schwester heiratete. Solange ein Mann lebt, hat er allerlei Beziehungen, allerlei Anhang. Aber dieser Mann ist tot. Und was für merkwürdige Sachen auch nach meinem Tod mit all diesen Menschen dieser merkwürdigen Welt passiert sind, mich brauchen sie nicht mehr zu kümmern.*
(S.191f. 第3章Ⅳ —— 下線とイタリック体は神田)

おれがまだ生きていたとき，おれには母と妹があった。その後おれに一人の友人ができて，その友人が妹と結婚した。一人の男が生きているあいだは，さまざまな交渉やさまざまな身よりがあるものだ。だがしかし，この男は死んだ。そしておれの死後にこの奇妙な世界のこれらすべての人びとに，たとえどのような奇妙なことが起ころうとも，彼らは（それらのことは —— 神田）もはやおれをわずらわす必要はない。 (山下・新村訳 p.149f.)

ヴァラウの内的独白のうちかなりの部分が，下線部からもわかるように，童話のような書き出しとなっている。ヴァラウは，「ヴァラウというひとりの男がかつて生きていたが，今はその男は死んでしまったのだから，その男のことを語ることはできないのだ。」と内面で自分に言い聞かせるようにして，黙秘を守っているのである。自分自身を，架空の物語の中の人間に見立てることで，黙秘を完全なものにしようとしているのである。以下では，内的独白の冒頭部分だけを列挙して，ヴァラウの内的独白における童話的書き出しの多用を示しておく。(注15)

D: *Als ich noch am Leben war, habe ich auch eine Frau gehabt. Wir hatten damals auch Kinder miteinander.* [---]
(S.192. 第3章Ⅳ 下線とイタリック体は神田)

E: *Als der Mann noch am Leben war, von dessen Söhnen hier die Rede ist, versuchte er nach seiner Art für die Seinen zu sorgen.* [---]

(S.192. 第3章Ⅳ 下線とイタリック体は神田)

F: *Als ich noch am Leben war, zog ich in den Krieg. Ich war dreimal verwundet,* [---] *Bin ich jetzt auch tot, so bin ich doch nicht im Weltkrieg gefallen.* (S.193 第3章Ⅳ 下線とイタリック体は神田)

G: *Der Mann, da er noch am Leben war, im Oktober 1918, trat dem Spartakusbund bei. Was soll das aber jetzt? Sie könnten ebenso gut Karl Liebknecht selbst zu einem Verhör bestellen, er würde ebenso viel, ebenso laut antworten. Laßt die Toten ihre Toten begraben.*

(S.193. 第3章Ⅳ 下線とイタリック体は神田)

D': おれがまだ生きていたとき，おれには妻もあった。あのころ，おれたちには子供もあった。.... (山下・新村訳 p.150.)

E': いまここで問題になった息子たちのの父だった男は，まだ生きていたころ，彼は彼なりに息子たちのために配慮した。.... (山下・新村訳 p.150)

F': おれがまだ生きていたころ，おれは戦争へ出た。おれは三度負傷した。...[中略]...いまは死んでいるが，世界大戦で戦死したのではない。

(山下・新村訳 p.150f.)

G': 男は，まだ生きていたころ，1918年10月スパルタクス団に加入した。しかし，いまそれが何だというのだ? カール・リープクネヒト自身を尋問してみるがいい，リープク・ネヒトも一言も答えず，何一つ言わないだろう。死者をして死者を葬らしめよ。 (山下・新村訳 p.151)

C，D，E，F，Gの下線部が，リーゼルの引用した例Bの下線部 *Es gab einmal einen Mann, der Ernst Wallau hieß* に続く童話的文体の内的独白である。これを本論の筆者は，本論2の項で，「内的物語」と命名しておいた。C～Gのヴァラウの「内的物語」においては，童話的語り出しという共通点はあるが，実は，厳密に言うと，‚ich' で語られる一人称小説型と ‚Der Mann' を主語とする三人称小説型とが混在している。前者は後者と比較すれば，当然，独白型により近い。黙秘への強い決心の中にさえも，客観性と主観性との間を微妙に揺れる心の動きはあったということになろうか。

内的独白の下位区分のうち，物語型のものを最初に取り上げたのは，リーゼルの例文の検討から入った本論の進め方による偶然にすぎない。また，内的独白の下位区分のうち，独白型と対話型については，紙数の都合で例文を示すことができないが，第4章Ⅲには，主人公ゲオルクの内面の葛藤が独白型で表出され，それがやがてヴァラウとの対話型に変わっていき，ゲオルク自身が自己の弱さを克服して次の行動を決めるときには，また独白型に戻っていくという，典型的な例が見られる。(注16)

『第七の十字架』の内的独白の文法形態を分類してみると，下記のようになる。

『第七の十字架』の内的独白の三つの型

- 内的独白（自由直接話法）
  - 独白型　一人称
  - 対話型　一人称対二人称
  - 物語型
    - 一人称小説型（語り手は内的独白の主体である登場人物）
    - 三人称小説型（語り手は内的独白の主体である登場人物）

(注17)

4．「死者」のテーマ ―― まとめに代えて

ここで少し例Bに戻るが，下線部の後半にある，② *Dieser Mann ist tot.* というモチーフはヴァラウの内的独白のすべてに貫かれている。「死んだように黙りこくっていた」という日本語の比喩を思い出すが，「黙っている」ヴァラウは，内心で自分自身を死者に見立てている。このことは，オーヴァーカムプの „Sie mögen sich selbst die Folgen zu schreiben, Wallau." というせりふに対するヴァラウの内的独白として，次のように展開される。

H: *Was kann es für einen Toten für Folgen geben, den man aus einem Grab in das andere wirft? Nicht einmal das haushohe Grabmal auf dem endgültigen Grab hat Folgen für den Toten.*

（S.198.　第3章Ⅳ　イタリック体は神田）

H': 墓から掘り出され，また別の墓へ投げ込まれる死者にとって，どんな結末があるというのか？ 最後の墓の上に巨大な墓石を建ててくれたところで，それさえ死者にとっては何でもありはしない。　（山下・新村訳 p.152.）

体験話法か内的独白かというような話法認定の話題からは大きくそれるのだが，ゼーガースは，ここでヴァラウに用いた死者のテーマを自作の中に繰り返し使っている。内的独白の拾い出しに限って作品を見たために浮かび上がってきたこの問題についても，ここで少し展開しておきたい。

ドイツ帰国後まっ先に書かれた長編『死者はいつまでも若い』[注18]は，ナチスに抵抗して死者となった人々の精神が，次世代の者たちにも根強く引き継がれていくことを描いている。マリーの過去の恋人でハンスの父エルンストは既に死者であるが，生きている者たちに力を与えている。ナチズムの犠牲になって亡くなった多くの死者たちのことがゼーガースの脳裏に焼きついていることは，『第七の十字架』の巻頭言「この本を，ドイツの反ファシズムの生者と死者に捧げる」を見ても一目瞭然である。しかし，本論の筆者としては，ゼーガースの中の死者のテーマは，ナチズムへの抵抗運動を通じて生まれたものではないと考えている。

では，ゼーガースの中に死者のテーマが宿ったのはいつのことだろうか。それを実証的に明らかにすることはやさしくないが，作品の中に現れた死者のテーマということなら，はっきりしている。現在までに確認されているゼーガースの作品の中で，最も古い作品，„Die Toten auf der Insel Djal. Eine Sage aus dem Holländischen, nacherzählt von Antje Seghers“[(注19)]が，まさに死者のテーマそのものを扱っている最初の作品である。6ページ足らずの短編で，1924年，『フランクフルト時事・商業新聞』のクリスマス特別号に発表されたものである。

「ディヤル島の墓の死者たちは珍しい人々である。」という書き出しは，まさに死者たちが主人公であることを示す。この死者たちは墓石や木の十字架を揺らすほどに，土中で足を突っ張ったりするのである。死者たちの大部分は海で命を落とした者たちである。この死者たちの番をしている牧師がまた変わっている。家族もない五十男の牧師は，日々，墓の死者たちを静まらせるのを日課としているのだが，あるとき，溺死している男を見つける。それは難破船のキャプテンであった。キャプテンは墓に葬られたのだが，ある夜，墓石を放り投げて，土の中から手を出しているところを墓掘り人夫に発見される。そして遂に動き出し，話し始めるのである。牧師はキャプテンにキャプテン自身の墓石を読ませ，墓の中に戻るように説得する。普通の死者は地面の中に我慢しているものだとさとす。そして牧師自身が死者だと明かすのである。

このように，作者が24歳のころには既にその精神の内に宿っていたと思われる死者の（蘇りの）テーマが，何に由来するものなのか，伝記的側面，文化史的側面，宗教的影響関係などの各方面から探っていくことは今後の課題であろう。作者が，この重苦しい「死者（の蘇り）のテーマ」を，ナチス支配下のドイツを描く小説の中で，執拗なほどに繰り返して確かめなければならなかったことは，時代にとっても作者個人にとっても，悲劇であったと言わねばならない。[(注20)(注21)]

〔注〕

1．この論考は，アンナ・ゼーガースの『第七の十字架』に関する拙論のうち，第３番目のものである。『第七の十字架』の話法研究としては，日本ドイツ文学会東海支部誌『ドイツ文学研究』第31号に掲載予定の拙論『「共感」の体験話法」に続く，第２番目の論考となる。

2．『ドイツ言語学辞典』p.402f. なお，本論の筆者は，特に断らない限りは，「内的独白」の用語を，言語形式を規定するものとして用いる。

3．Hosaka (1978), S.13.

4．Steinberg (1971), S.118-131.

5．Fludernik (1993), S.280-318.

6．Pascal (1977).

7．Riesel (1954), S.329.

8．『ドイツ言語学辞典』p.402f.

9．Riesel (1954) とRiesel (1959) は，文献一覧からもわかる通り異なる文献なのだが，実例を含めて，記述内容はほぼ同一と言っても過言でないくらい似通っている。表現には多少の差が見られるが，同一の考察を二つの文献に活用したのではないかと思われる。

10. Cohn (1969), Steinberg (1971), S.293-337, Hosaka (1978), p.14, 鈴木(1992b), p.167-178. 『ドイツ言語学辞典』p.402f. など参照。

11. Christa Wolf “Was bleibt” には，主人公のich が自分自身の内面で自分自身に向かってdu-Form で語りかける独白が見られるし，『第七の十字架』でも，ゲオルクの内面に響くゲオルク自身の中のヴァラウの声が，ゲオルクに向かってdu-Formで語りかける内的独白が見られる。

12. 海老原 (1963), p.81.

13. Steinberg (1971), S.15f.

14. 例の符号がBから始まっているのは，本稿の注１に断ったように，この論考が筆者のもう一つ前の論考に内容的に続くためである。『第七の十字架』の中の体験話法や内的独白の例文中，Riesel. (1954)初出の二つの例文に同一の符号が付くのを避けるためである。

15. ヴァラウの内的独白に見られるような童話的語り口の反復は，例えばギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』第一部終章の「信仰　希望　愛」の中にも多用されている。そこには，‚Es war einmal---‘ が24回も使用される。(dtv. 3.Auflage, 1995, S.227-237.)

16. Das siebte Kreuz. (Aufbau) 1997. 第４章Ⅲ. S.227-234.

17. ここで，ジェラール・ジュネットの物語言説の分類を想起してみるのもよい。ジュネットは，三人称小説と一人称小説という区別をせず，語り手が物語世界内の登場人物に含まれるか否かを分類する。含まれる場合は一人称の語りとなるし，含まれない場合は三人称の語りとなるのである。

ジュネット,G／ 花輪光　訳(1984), p.123.参照。[Genette, Gêrard: Discours du rêcit. Paris (Seuil) 1972.]

18. Die Toten bleiben jung. Neuwied und Berlin (Luchterhand) 1956.
19. In: Der letzte Mann der Höhle. (Erzählungen 1924-1933) Berlin (Aufbau) 1994. S.7-12.
20. ゼーガースは悲劇の似合わない今日でも繰り返し悲劇を語り続けようとしたというハンス・マイヤーの指摘がある。 Mayer (1993), S.283. 参照。
21. 『第七の十字架』の内的独白については，有田 (1994) にも言及されている。しかも，Riesel (1954) に引用されている例Bを含むヴァラウの尋問の場面が，長いコンテキストで引用され(p.91)，「内的モノローグ」と「直接引用」(後者は，直接話法で引用符のあるものに対する有田氏の用語) の類似が指摘されている。(p.92) 但し，有田 (1994) では，Riesel の文献は参照されていないようである。

〔参考文献〕

＜使用テクスト＞

ドイツ語版：Seghers, Anna: Das siebte Kreuz. Berlin (Aufbau) 8.Aufl. 1997.
英語版：Translated by Galston, James A.: The Seventh Cross. New York (Manthly Review Press) 1987.
日本語訳：山下肇・新村浩訳: 『第七の十字架』 東京 (河出書房新社) 1972.

＜日本語文献＞

有田潤：内的モノローグ ── 予備的考察・作品研究 ── 「Waseda Blätter」東京 早稲田大学ドイツ語学・文学会. (1994) Nr.1. S.85-99.

海老原晃：いわゆる体験話法について (四) 「人文研究」第15巻第 2 号 大阪 大阪市立大学文学会. (1964) p.30-86.

川島敦夫他：ドイツ言語学辞典. 東京 紀伊國屋書店, 1994.

ジュネット，ジェラール／花輪光訳：物語のディスクール. 東京 書肆風の薔薇, 1984 (Genette, Gérard: ,Discours du récit.' *Figures*Ⅲ. Paris: Seuil, 1972.)

鈴木康志：1人称現在形として発現する体験話法「ドイツ文学研究」(日本ドイツ文学会東海支部) 第24号 (1992) p.167-178.

保坂宗重：テキスト理論による文章の分析 ── 日本語の体験話法について ── 『日本語と文化，社会 5「ことばと情報」』 (三省堂) 1977, p.161-196.

保坂宗重：G・シュタインベルクの体験話法研究 「茨城大学教養部紀要」第16号 p.189-209.

保坂宗重・鈴木康志: 体験話法 (自由間接話法) 文献一覧 ── わが国における体験話法研究 ──. 水戸 茨城大学教養部. 1993.

＜ドイツ語・英語文献＞

Seghers, Anna : Die Toten bleiben jung. Neuwied und Berlin (Luchterhand) 1956.

Seghers, Anna : Der letzte Mann der Höhle. Berlin (Aufbau) 1997.

Cohn, Dorrit : Erlebte Rede im Ich-Roman. In : Germanisch-Romanische Monatschrift (1969) 50／ Neue Folge 19, S. 305-313.

Fludernik, Monika : The Fictions of Language and the Languages of Fiction. London and New York (Routledge) 1993, p.280-318.

Hosaka, Muneshige : Die Erlebte Rede. Ihre verschiedene Formen bei Franz Kafka und Bertolt Brecht. Mito (Ibaraki-Daigaku-Kyoyobu) 1978, S.11-52.

Mayer, Hans : Der Widerruf über Deutsche und Juden. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1994, S.271-285.

Pascal, Roy : The Dual Voice. Free indirect speech and its functioning in the nineteenth-century European novel. Oxford Road (Manchester University Press)／ New Jersey (Rowman and Littlefield) 1977.

Riesel, Elise : Abriss der deutschen Stilistik. Moskau (Verlag für Fremdsprachige Literatur) 1954. S.326-336.

Riesel, Elise : Stilisitik der deutschen Sprache. Moskau (Verlag für Fremdsprachige Literatur) 1959／2. Aufl. 1963, S.404-411.

Steinberg, Günter : Erlebte Rede. Ihre Eigenart und ihre verschiedene Formen in neuerer deutscher, französischer und englischer Erzählliteratur. Göppingen (Alfred Kümmerle) 1971.

Stephan, Alexander : Anna Seghers : Das siebte Kreuz. Welt und Wirkung eines Romans. Berlin (Aufbau) 1997.

（かんだ　かずえ　独文）